

# 里見淳「姥捨」考

工藤 茂

## はじめに

日本文学の流れの中に、〈親棄〉という一つのモチーフがある。それは古代から現代に至るまで、日本文学のあらゆる分野に互って多様な姿を見せている。柳田国男はこれらのモチーフを、「親棄山」<sup>(1)</sup>というエッセエにおいて、手際よく次の四種に分類している。

- (一) 親棄<sup>もつこ</sup>奮型の話
- (二) 難題型の話
- (三) 鬪争型の話
- (四) 枝折<sup>しおり</sup>型の話

以上四種のモチーフを簡潔に要約すると以下のようになる。<sup>(2)</sup>

- (一) 親棄奮型  
一人の男が年老いた親を奮に乗せ、息子と二人でそれを担いで山へ捨てに行く。帰る時に息子が奮と棒を持って帰ろうとする。男がその理由を聞くと、息子は、父親（その男）が年を取った時に、これを使って捨てに来るのだと答える。男はそれを聞いてはっと気づき、親を連れて帰った。

## (二) 難題型

昔、ある国の王が棄老の命を下し、これに服さぬ者は敵罰に処することにした。ところが、一人の孝行者がいて、年老いた親を棄てるに忍びず、床の下に匿して養っていた。ある時、敵国から難題が持ち込まれる。これを解かぬと攻め滅ぼされるかも知れない。だが、誰もこの難題を解くことができない。そこで、その孝行者が匿して養っていた親に聞くと、老人は簡単にその難題を解決してくれ、国の危機は救われた。その経緯を聞いた王は息子に褒美を与えると共に、棄老の命を取り消した。

- (三) 鬪争型  
ある男の嫁が、その男の年老いた母、または姨を嫌い、男を唆して母（姨）を山に捨てさせる。ところが月の明るい夜、男は山に捨てた母（姨）を思つて悲しくなり、ついに老婆を迎えに行つた。

- (四) 枝折型  
何らかの事情があつて、その子が親を背負つて山に捨てて行く。親は行く路々小枝（芥子種・紙・薄の葉）を折つて落として行く。子供が不思議に思つてその訳を尋ねると、親はおまへが帰る時、道に迷わないように葉をして置いてやるのだと答える。子供は親のその慈愛に感動して、親を連れ帰り以前にもまして孝養を尽くした。  
これら四種の型をさらに細かく分類すると

## (一) 親棄奮型

## (二) 難題型

① 難題系

蟻通明神の縁起系

(三) 闘争型

① 闘争系

(a) 「大和物語」系

(b) 「日本霊異記」「統歌林良材集」系

② 老婆致富系

(四) 枝折型

になる。しかし、ここでは詳解を避け、必要に応じて説明を加えていくことにしよう。

さて私は今、このようなモチーフを持つ小説を近代文学の中から一つ取り上げ、それがこのような文学の流れの中で、どのような特色を持つているのか、検討を加えてみたいと思っている。

一

あらゆるものに流行があるように、文学にも時代の好みというものがあるようだ。生前に多くの作品を残しながら、没後、殆ど顧みられなくなってしまう作家が多い。里見弴という作家もそういった作家の一人である。

里見弴は有島武郎、生馬の弟である。後に『白樺』から離れるが、白樺派の作家として多彩な仕事をした。同じ白樺派の作家志賀直哉と違い、晩年まで筆を捨てようとはしなかった。その小説には自伝性の強い作品と、そうでないものがある。前者の系列に入る小説『姥捨』が発表されたのは、戦後昭和二十一年のことである。当時鎌倉文庫から発刊されていた雑誌「人間」の一月号、二月号に分割して発表された。その後、東京出版(株)から出された短篇小説第十六集『姥捨』(昭和23年)に「短い絲」「暁月晴」「人間」「みごとな醜聞」と共に収

められ、今は『里見弴全集』第九卷(昭和53年・筑摩書房)に入っている。

この小説は、その題名が示すように、(親棄)のモチーフを意図的に使って書かれた作品である。そこに下敷きとして使われているのは、伝承というよりは謡曲のそれであろう。ただし、これは姥を捨てる話ではない。それを疎開させる話である。

昭和二十年五月といえば、周知のように、日本全土が激しい空襲に悩まされていた時期にあたる。この小説の時間はちょうどこの時期に設定されている。主な登場人物は加島晋策、お孝、お春の三人。晋策がお孝とお春を空襲の激しい東京から、信州上田の知人宅に疎開させるというのが、この小説の内容である。

昭和五十三年晩秋に書かれた全集の「あとがき」<sup>(3)</sup>で、作者はこの作品について次のように述べている。

永らく、下六番町で、泉鏡花先生と斜向ひに住み、「緑蝶さん」の仇名で可愛がって頂いた「良」と永年勤続の老婢とを信州の知人のもとに疎開させた時の実際に、さして手を加へずに書きながらした小品。その後半月とは経たないうちにそこら一円焼け野原となつたのだから、かなり切迫した事態だつたのに、そのわりには、登場人物の二人とも呑気なものだ。作者の私自身は、――ひよつとすると、これが生き別れの瀬戸際かも知れない、との真剣さだつただけけれど、そこらは「姥捨」なる古語のうらにほかしたつもり。いくら慌て騒いだところで、世事万端、成るやうにしか成らない、といふ、安易、平俗な落ちつきくらゐはあつたかも知れないにしても、今にして思へば、それとても旧めかしい時代感覚に過ぎまい。戦時でも遠くなりにけり、だ。

下六番町の別宅が空襲で烏有に帰したのは、全集第十巻の「閑中忙談」に収められてある「朱き机」の追記によると、昭和二十年五月二十五日のことである。その半月ほど前に体験したことを小説化したの

が「姥捨」だというのである。したがって、小説の登場人物は、加島晋策が作者、つまり里見弴、お孝がへ永らく、下六番町で、泉鏡花先生と斜向ひに住み、「緑蝶さん」の仇名で可愛がつて頂いた「良」、お春がへ永年勤統の老婢」と見ていいであろう。

ちなみに小説では、加島晋策の〈憂国慨世の気風〉が親譲りであることを説くために、彼の両親を登場させているが、その両親を以下のように紹介する。

へ父親は天保十三年から七十五年、母親は安政元年の生れで八十三歳の寿を保つ間には、「御維新」を頂点とする世情の幾変転に遭遇してゐる。伊藤公に随行して十九世紀の列強を見学し、大蔵省の「官員さん」となつて政治の一端に関与し、転じて民間の鉄道、郵船、銀行等の事業にも尽瘁して来た父親……（略）南部藩の「奥」に勤めて、薙刀小脇に戌辰の戦火をくぐり、微禄して、賃仕事に漸く口を糊し、一躍「官員さんの奥様」となつては、洋装で鹿鳴館の夜会に列する、といふ風に、一身の経歴としては波瀾に富んだ母親……

里見弴は本名を山内英夫というが、先にも述べたように、父は有島武、母は幸子。紅野敏郎氏作成の年譜（全集第十巻）によれば、父は薩摩藩島津氏の一支族北郷（ほんごう）氏の臣。維新後、大蔵省に出任、明治十一年、欧州に派遣され、帰朝後、十五年には、横浜税関長に任命された。その後国債局長兼任、後、専任と成つた。官僚生活を辞した後は、第十五国立銀行世話役、後、取締役、日本郵船監査役、日本鉄道会社専務等を歴任、及び、兼任した。

母幸子は、へ朝敵側にまわつた南部藩士族山内七五郎・静子の三女。維新後、流離の苦をなめ、明治十年、有島家に嫁した。里見はこの母方の家の養子と成つたので、山内姓となつてゐる。

以上引用した年譜の記述と、作者が小説で紹介している晋策の両親のそれとを対照させてみると、晋策がほぼ作者と同一人物であることが理解できる。

他の登場人物のうち、お孝のモデルは先にも触れたが作者自身の「あとかぎ」によると、「良」という女性だという。彼女は小説にへ番町の家の主人と紹介され、その科白にへそれア、鎌倉には、奥さん、清雄さん、誠子さん、お孫さんまでいらつしやるんですもの、そこへ行くと、あたしの方は世に謂ふ二号さんでせう？ なんだつて二の次に廻されるのよ、……とあるように、晋策、つまり里見の妻以外のもう一人の女性であるらしい。へいくつになつても雛妓のやうなことを……という表現から、僅かに、かつて雛妓であつたことを推測させる女性である。実は彼女はこの小説以外にも「本音」、「同類」、「骨」、「喜代女日記抄」などの作品にその姿を見せる女性であることが、作者の「あとかぎ」によつて分かる。特に「骨」には「R」というイニシャルで登場しているので、それが「良」のそれだと推測できるのである。「同類」では彼女のことをより詳しく書いてるので、その作品によつて彼女の輪郭をなぞつてみよう。

この小説でも彼女は「お孝」という名で登場する。お孝はへ十三の年齢に、赤坂で一二と言われた芸者屋の養女に入籍し、肯かぬ気、贅沢、銭勘定の疎さ、芸熱心、大袈裟など、その頃の芸者氣質の一から十まで洩れなく叩き込まれて、元老はじめ名だたる政治家だらうと、財界の大立者だらうと、気に食はなければ尻目にもかけない、謂ふところの「一流」で、勿論、然るべき「旦那」があり、年齢も三十近い「自前の大姐姐」の、飛ぶ鳥落とす威勢の絶頂にへ関東大震災で一切合切を焼いてしまった。へ晋策の座敷に聘ばれて来たのは、その丸一年前の九月のこと。それから長い間、清い交際があつた後にやがて晋策と結ばれ、へ空家めくまで殺風景な番町のうちへ、それこそ鶴の舞ひおりのやうにやつて来た。へ生みの父親には十五で、母親には二十二で死別れ、肉親としては、京橋の金物屋に嫁けた妹た一人、今や、誰の掣肘も受けることのない一個の堀江孝。それが作者の「あとかぎ」によれば「良」であつた。作者はさらに彼女について、「喜代女日記抄」

の「あとがき」に「良」は筆まめな性で、びつしりペンで書きつらねた、全部「大学ノート」で、何十年間かの、何十冊かの日記が、残らずしまつてある筈。と書き、その生涯を「五十八年間」と記している。

もう一人の登場人物お春については、「姥捨」の中に「お春は、母娘二代に互る日本橋区内の女髪結の後身で、震災で家財を失つてから、縁あつて晋策のもとに、生れて肇めての女中奉公をするやうになつたものの、猫の額ほどにもせよ、以前住んでゐた土地から地上権の収入もあつて、いやに気が大きいかと思ふと、一面老嬢をむきだしの意固地が強く、そこへ世間の狭さから来るゴチ／＼の利己主義が絡んで、決してつき合ひいゝ女ではなかつた。」と紹介されている。「同類」の「あとがき」に、「これも「良」と永年いがみ合ひながら、実は無二の仲よしだつた老婢の春とを、故意といやがらせに「同類」と呼んだ……とあるから、お春という名は本名であろう。「同類」では「永年晋策が仕事をしてきたこの別宅での、ハルといふ女は、いつかもう「女中」といふやうな、そんな他人行儀なものではなくなつてゐた。よく言へば「家宝」悪く言へば「痛」で、事実またその両面を兼備した、一種独特な存在だつた。」と書いてある。

ところで、小説ではお孝が五十一歳、老婢のお春が六十五歳に設定されている。この年齢設定に特別な理由はなさそうである。何故ならば、この小説において二人の年齢をこのように設定しなければならぬ必然性は、見当たらないのだから。おそらく、二人の実際の年齢をそのまま使つたものであろう。晋策の年齢に関しては、小説には特に言及はない。しかし、当時作者は数えて五十八歳であつたから、前述したように、晋策も同じ年であつたと見て差し支えあるまい。この晋策が、以上のような二人の女性を、信州上田の疎開先まで送り届けようというのである。

## 二

「夜中の空襲が頻繁になるにつれて」へまぐれに一二機しかはいらぬい約束の東京も、見る間に灰にされて、親しい仲から、罹災者や死ぬものすらできて来た。番町の主人であるお孝は臆病者の可怕がりである。焼夷弾や爆弾がいつ降ってくるか分からない時代になつた。疎開するかどうか晋策に相談すると、彼はへもし、越す主意が、死にたくない、に在るのなら、どだい無駄な話と思ふけれど、可怕い想ひをしたくない、に在るのなら、生半可な近郊などより、いつそひと思ひに、信州か甲州の山奥へでも引ツ込むことだ、それならば、まんざら無意味とも思はないが」と言う。それでも踏ん切りのつかないお孝であつたが、散々迷いに迷つた末、疎開を決心する。そこで晋策は二人を疎開させることになる。その道中には左のような滑稽なことや、怖いことも起こる。

「おい、ちよつと！」

両手の荷を、置くといふより落しかける、その真下の舗道に。汚らしいものがあるのに気がついて、注意してやらうとする間も待てず、ゴトンと……。

「なアに？」

「置いちまつてからで間に合ふか。馬の糞の上だ」

「あら、さう？」

これは晋策とお孝のやり取り。次はその後で、お孝が鞆を欺し取られそうになつた時のこと。お孝の提げた鞆を奪ひ損ねた男が、彼女に投げた捨て台詞が「けちんぼ！」だつたという話。

——まだ元蓄が去らず、聞く耳あらば聞かせたいくらゐの気持

で、声も低めず喋り続けて、そのへんまで来た時に、お春が、

「けちんぼ！ つて申しましたんです」(略)

「併し、けちんぼとは、……そいつの気持ちとしちやア、それに違ひなかつたらうけど、言ひも言つたもんだね」

あとさきの、聞いているとも思へなかつた人々の間からも笑ひ声が起り、続いて、あぶないことでしたねえ、とか、ほんとにこの節は、ちつとだつて油断はなりませんよ、とか、多いんだ、さういふのが、で、似たやうな話を持ちだすとか、忽ち、旧い知り合ひでもあるかのやうな、心おきない言葉が、それからそれへと拡がりつゝとり交されだした。

戦時下の暗い世相にもかかわらず、そこにあつた笑ひを見逃すことなく表現しているところに、この作品のリアリテイの一つがある。けれども、ここに登場する作者と等身大の晋策の心の中は暗い。彼は列車の座席に腰を降ろして、以下のような時局観を披露する。

満州を発祥の地とする一敵国が、敢て橋頭堡を占めるまでもなく、づる／＼べつたりに上陸して来て、二・二六や五・一五の流血で十分に威嚇を利かせて置いて、あとは職業政治家に上越すほどの邪知佞奸や愚劣怯懦を無恥厚顔にあらずんばよくしない押しの一手に包んで、夙の昔に日本国は完全に占領され、人民は悉く捕虜たるに過ぎない、——晋策は、堅くこのやうに信じてゐた。親譲りの悲憤慷慨も憂国慨世も、そこまでいくと、謂はゞ「宝の持ち腐れ」で、よほど親しい友達でもなければ、うかつに口外できることではなかつた。さういふ見地からすれば、うかつに口外首として、外郭団体の廣忠勤ぶりと私利との雙成、腰巾着になり終せた財閥、降つては国民の無知蒙昧、自称知識人の、賢らに時局をあげつらふなど、いつとして目にも耳にも快いものはない。などとぬかすお前自身はどうか。いつぱしリアリストがつてゐる文学者のくせに、身量にも、日本人といふものを過大に評価して、うま／＼一杯くはされてゐたではないか、と思へば穴にもはいりたい気持ちだつた。

ここに敵国というのは、実は当時の日本の「軍部」のことである。その「軍部」に晋策自身も捉われの身だ。だからへいかに悶搔かうが足搔かうが、自分を例外と観るわけにはいかない。批判の刃は自ら彼自身に戻つて来て突き刺さる。そこで不言実行、へかの敵国の元凶を殺して自分も死ぬのだと考えて、結局はそれも犬死ではないかと思ひ至る。しかし、へ犬死でいゝんだ。百人が百人、千人が千人、それをばか／＼しいことに思つてゐればこそ、いつまでもこんな世の中が続くんだ。一番初めが犬死なら、次は猪死くらゐになり、虎死、獅子死と、だんだんに人間死へもつていけばいゝんだ、などと、へらず口に類するやうな呟きもみる／＼微かになつて、間もなく、神経の平行を回復すのであつた。

つまり、晋策はこの戦争をへもと／＼(略)「軍部」なる敵国が無理に相手を見めて、真の日本国自体からいへば、私闘に等しいものだ」と観ているのだ。この観方は作者里見の戦争観と見て、おそらく間違いがなからう。そして、このような時局観を公表することは、敗戦を俟たなければ不可能だったのである。当時のそのような状況について、作者は登場人物の晋策にことよせて、へ両親の生きてゐた頃には、誰憚らず言へたからいゝが、箝口令を敷かれ、それを犯してまで、——命を的に発表するだけの熱意や勇氣は欠きながら、而も文章を以つて世に立つ晋策にとつて、これ以上いやな時代、これ以上情ない母国といふものは、空想にも浮かばなかつたくらゐだ。文章で、少しくやりはやつたが、ある程度まで来ると、きまつて日の目を見ることはなかつた。と叙べている。

この小説が執筆されたのは、戦中であつたか戦後であつたか分からない。しかし、発表されたのは先にも述べたやうに戦後のことであつた。それゆゑ、晋策のこのような時局観が、検閲によつて削除されることなく残つたのである。この時局観によつて、私は里見の戦中戦後を通して変わらない姿勢を、知ることができたのであつた。

苦勞して汽車を乗り継ぎ、お孝とお春を送って晋策が着いた目的地は、へやへ傾きだした陽を背負つて、目に痛いほどの、家々の白壁、髪の毛のやうに、重く嫋かに揺れ騒ぐ柳の枝、道端の小流れに、尻を振りふり浮いて行く木ツ端の迅さ、——何一つとして、今日までのお孝たちの生活と繋がりのあるものではな——いところであった。女二人の疎開先は、かつて晋策の許に文字の弟子入りをしたことのある都留の実家、大井という大きい農家。やっと荷も着き、後片づけを済ませ、いよいよ明日は東京に帰るという前の晩、もつと正確に言えはその早晩、晋策ははばかりに起きた。

いゝ心持にすませ、帰りかけると、地上に、鮮な影法師があつた。月齢などに無頓着な晋策にも、およそ二十日がらみと思はれるおそ月が、雲ひとつない西の空に、嘘のやうに、ばかりとかゝつてゐた。静な、それで豊かな感じのするいゝ晩だった。

晋策はいったん家に戻って重ね着をした上で、鎮守の森に詣でた。

——お願ひ申しあげます。どうぞ、二人の者を御守護くださいますやうに……。お預け申して帰りますから、何分、あとのことは、よろしくお願ひ申し上げます。

いつの間にか、ピツタリ両掌を合せて一心不乱に念じてゐた。涙がとめどなく頬を流れ落ちて来た……。

長い間連れ添つた妻同様なえは喧嘩ばかりしているお孝と、老婢のお春ではあつたが、二人をここに置いて空襲の激しい都に帰つていく晋策の気持ちは、右のようであつた。

鎮守の森を出た彼の体を、信濃の五月の月の光が暖かく包む。つい口を衝いて出たのは、いろいろ稽古した中で一番最後まで残っている謡曲であつた。

わが心慰めかねつ更科や 姥捨山に照る月を見て 照る月を見て

それより前だつたか、あとだつたか、続きはわからず……。

然れども雲月の 或る時は影満ち また或る時は影欠くる

急にぐツとこみあげた。もう姥たちの上ではない、祖国の運命が悲しかった……。

晋策の思ひは、自分たちの運命への思いを超え、「軍部」という敵国によつて滅びようとしている祖国の運命を悲しむ。唄っている謡曲は「姥捨」のおしまいの方。月の名勝信濃の国姥捨山。そこに、仲秋の名月を見ようと、都から二人の男がやってくる。一人の里の女が現れて、山に捨てられた老女がへわが心慰めかねつ更科やと歌つた旧跡はここだと教える。実はその女こそ昔歌をうたつた老女の霊で、夜半にもう一度男たちの前に白衣を着て現れる。老女は月に関する伝説を説き、美しい舞をまう。明け方近く、男たちは帰つてしまい、老女人山に取り残される。

噛みしめ、噛みしめ、命尾寿六よりもつとひどい震へ声のまゝ……。

有為転変の世の中の 定めなきを示すなり

いくらか元氣をとりなほし、シテらしい重々しさで……。

むかし恋しき夜遊の袖

あとがわからず、もう一度くり返して……。

わが心慰めかねつ更科や 姥捨山に照る月を見て 照る月を見て

朗々と、われながら聞き惚れるやうな声だった。——口にさうは謡つても、「わが心」が、いつか、すっかりもう「慰められ」てゐることには氣もつかずに……。

小説「姥捨」はこうして終わる。見事な幕切れである。信州上田の五月。月は仲秋の名月ではないが、二十日前後の月。朗々とした晋策

の声に込められた、二人の姥の運命と亡国への想い。しかし、二人の姥はここに捨てられてこそ、生き永らえことができるのだ。晋策の心は、いつか、知らず知らずのうちに、穏やかに変わっていったのであった。このように、謡曲「姨捨」に重ねてこの小説を閉じたところに、この小説の特色がある。そうすることによって、この小説は古代から日本文学に流れていた「親棄」のモチーフを汲みとって、その文学の系譜に位置づけられることになる。

もっとも、作者は最後の場面だけに姥捨のイメージを重ねているわけではない。既に「二」の最後の場面で、晋策がお孝に向かつて言う科白の中にそれが出てくる。「冗談をいっちゃいけない。こなひだも言つたとほり、上田といやア姥捨の近所だ。その姥捨に、二人の姥を捨てて行く、なか／＼の大事業だ」というように。そして、「三」にもそれは見えているのだ。

「さういふところに、晋策は、二人の、因縁浅からぬ「姥」を捨てに来たのだ。さうだ、少しでも生きる可能性の多いところに捨て置きためだ。」

「女子供は「生」に捨て、男は、いかに軍部の占領下に置かれてゐるにもせよ、祖国滅亡の最後の日まで、断じて「死」に踏み止まる。――これが晋策の肚の底だつた。」

晋策は日本の最後の時期は早くても今年のうち、延びても丸一年そこそこと見当をつけていた。お孝とお春を疎開先へ送っていくことが、二人への最後の心尽くしだと思つてゐた。今生の生き別れになるつもりであった。晋策のこの気持ちは、そのまま作者里見の良と春への気持ちでもあった。だから彼は、「あとがき」に「そこらは「姥捨」なる古語の裏にほかしたつもり」と書いたのである。つまりこの小説の題名は、因縁浅からぬ二人の「姥」を「生」に捨てるという意味でつけられたものであった。

さて、これまで見て来たようにこの小説は、「はじめに」において述

べた従来の「親棄」のモチーフとは、違ったそれによって書かれた小説である。空襲の激烈になった戦時下、因縁浅からぬ二人の「姥」を疎開させること。それがその素材であった。しかしこれまで述べたように、作者はその素材をもとにして日本の文学を縦に流れている「親棄」のイメージを重ね、新しい戦時下の「姥捨」を創り上げたのであった。

この小説では、二人の姥は「生」に捨てられる。ということとは信州上田は、二人の姥にとつて蘇りの場となる。実はこのような内容の「姥捨」が昔話の中には、有つた。それは(三)闘争型の②のそれである。そこでは山に捨てられた老婆が、神の助けによって若返り、かえって幸せになるのだ。山で寂しく死んだ謡曲「姨捨」の老女と異なり、小説の二人も空襲の激しい東京よりずっと安全なところで、生を保証されることになる。そして晋策は、いつ空襲で死ぬかも知れない東京に帰っていくのである。そういう意味では、この小説は新しい「姥捨」でありながら、大きな範疇では(三)の闘争型の②に入れることができる小説だったのである。

### おわりに

現代文学のなかに、「親棄」あるいは「姥捨」の系譜に位置づけることの可能な作品は、結構ある。ここで扱った里見弴の小説もその一つである。柳田国男の「親棄山」、井上靖の「姨捨」、深沢七郎の「檀山節考」等はいずれもそこに母性思慕の姿が見られた。太宰治の「姥捨」は山を蘇りの場とする作者の転生を扱ったものであった。<sup>(6)</sup>『日本お伽噺』『日本お伽集』のそれは、題名は「姨捨山」でも親孝行の話であった。<sup>(7)</sup>里見弴の「姥捨」は二人の「姥」の疎開先を蘇りの場と見る限り、太宰のそれに近い。しかし、それが「軍部」支配下の当時の日本の状況における必然として語られる点において、それとは異なっていたの

である。

(注)

- (1) 柳田国男『母の手毬歌』(昭和24年12月8日・芝書房)
- (2) 拙稿「現代文学に現れた「姨捨」」(『日本文学論究』第三十九冊、國學院大学国語国文学会)
- (3) 『里見弴全集』第九卷(昭和53年12月20日・筑摩書房)の四一八ページ。
- (4) 同右全集第十卷の紅野敏郎氏作成の年譜によると里見弴こと山内英夫の家族は次の通りである。  
妻 まさ、長女 夏絵(生後四十八日で夭折)、長男 洋一、次男 鍼郎、次女 瑠璃子、三男 湘三、四男 静夫。
- (5) 同右年譜の昭和十七年四月の項に、ヘリベラルな立場から時局を批判した「風炎」を「日本評論」(翌年五月まで、前編完結、以下中絶)に発表。とあることなどは、傍証になろう。
- (6) 拙稿「現代文学における「姨捨」の系譜」(五)(六)(七)(いずれも『別府大学国語国文学』に発表) 参照のこと。
- (7) 拙稿「現代文学における「姨捨」の系譜」(一)(『別府大学国語国文学』第21号) 参照のこと。
- (8) 拙稿「現代文学における「姨捨」の系譜」(四)(『別府大学国語国文学』第24号) 参照のこと。